

飛べない蛙

—僕らの生きる理由—



概要

生きる理由は何だろう。
どうして僕らは生きていくのだろう。

生きることが「得意な人間」と、
生きることが「不得意な人間」がいる。

生きることが、ちょっぴり苦手で不器用な15人の物語。

目次

一、サクラ

二、思い出虫

三、スパイシー

四、紅い月

五、マイ ヒーロー

六、フレンズ

七、ダレカ、タスケテ

八、四角い部屋

九、青い葉

十、命の雫

十一、チョコレートペイン

十二、桃缶

十三、雪の人

十四、ホワイトシャワー

十五、飛べない蛙

一、サクラ

ソメイヨシノが咲き誇る
人々はその美しさに魅せられる
多くの人々が愛する桜と春
人の胸に芽吹く希望や、幸せを感じ合う季節
毎年、彼らはそれを眺めるために、飽きもせずにひしめき合う

言うまでもなく、桜は美しい
天然の淡い美が、心に沁みこんでくる

何度訪れても、景色は何も変わらない
子供たちが無防備に、はしゃぎまわる
酒に飲まれた大人たちが、醜態をさらしている
美しいものに囲まれながらも、彼らはきっと何も見ていない

何だか滑稽な世界を永遠と見せられているようで
ただ私は静かに桜を見上げている

「桜はいいね」
家族が繰り返すそれに私はそうだね、と応える

「来年も来ようね」高揚しながら、話しを止めない彼らの横顔を眺め、毎年きまって思う

これが幸せなのか？
これが孤独なのか？

心がくもる理由など見つけれないくらい、桜は美しい
その桜を包む春もまた美しい
けれど、ひどく美しいものは時に残酷なほど、人の心をしめつける
否応なく自分の弱さを照らし続ける

幸せではない
私は孤独だ
桜の向こう側に、私の本当の心が見える
ずっと前から、それを見ないように通り過ぎてきただけだ

人はきっと生きれば生きるほど、孤独になる
生きれば生きるほど、孤独を知る
たとえ自分の傍に誰かがいようとも
一度、入り落ちた心の溝だけは埋められない

また来年も、私はこの景色の下にいるだろう

そうやっていつまで、春と桜を見送っていくのだろう
少し細くなった私の肩に寄り添うように動かない一枚の花弁を
私はただ静かに振り払うだけだった

二、思い出虫

本当に欲しかったものは、手に入らなかった
本当に愛していた人は、私ではなく、別の人を選んだ

よくある話。どこにでもある話。
今さら、仕方のない話。

一人、街を歩く

私が欲しいものを持っている人達
そして、私が持っているものを欲しい人達
結局はきっと、ないものねだりかもしれない

人の欲は終わりが無い
寂しさもきっと、終わりが無い
誰にも言えないむなしさと悲しさを埋めるように、縫うように私は歩く

そして、ゆっくりと思い出す
幸せだった思い出を一つ、ひとつ思い出してゆく
全ては過去のもの。今ではない過去の記憶。

日曜日の昼下がりの公園は、たくさんの人と声があふれていた
行き交う人は、肩を並べ歩き、当たり前のように笑顔をこぼす
一人、ベンチに座っている私は、存在していないかのように音のない世界にいた

楽しそうに笑う家族連れの声が、私の耳を痛いほど刺していた
母と父に手を差し出す子供
その手を握り返す両親
まるで、永遠の幸せを知っているかのような彼らの笑い声

できるのなら、私もその小さな手を握って見たかった
母という人生を歩いて見たかった
一人ではなく、三人でこの場所にいたかった

これからも知ることはない世界が、目の前にあった
けれど、涙は出ない。どうしても泣けなかった
ただ下を向いたまま、私は動けなかった

小さな音がする方を見上げると
私が見つめていた子供が、ジュースを持って立っている

慌てて見つめ返すと

その子の少し離れたところに立っていた両親が、穏やかな表情を浮かべこちらを見ていた

どうやら間違っただけのジュースを買ってしまったようで
（良かったら、どうぞ）と私にそれをくれようとしていた
「どうじよ」とその子は、やっと聞き取れるような言葉を呟き
白く柔らかそうな手で、私にジュースを渡そうとする
薄茶色の美しい髪の毛、丸くて小さな顔、
子供特有の甘い香りが、私の心を強くねじった
絞り出すように、たった一言「ありがとう」と私は言った

この手を伸ばせば、その子を奪えるくらい私は近くにいるのに
なぜか、とても遠くに彼らを感じた

「本当にありがとね」

私は、不器用にもその子の頭を撫でた
満面の笑顔を浮かべながら、彼女は両親のもとへと走った
差し出したその子の手を彼らは、とても満足そうに握り返した
そして、小さく私に会釈して、何事もなかったかのように三人は去っていく

ジュースに目をやると、にっこりと笑う二匹のクマの絵がプリントされていた
あまりの可愛さに、私は思わず頬が緩んだ

三人の後ろ姿が見えなくなるのを確認してもう一度、それを眺めていた

涙がこぼれていた
少し気を抜くと、次から次へと流れだした
私の欲しかったもの、手に入らなかったもの
そして私にくれた、三人からの小さなプレゼント

泣き方さえ忘れていたのに、不思議なくらいに心は涙をためていたようで
体中が熱くなっていく
通行人が不思議そうに私を見ていくけれど、もうどうでもよかった
悲しくて、苦しくて、嬉しくて、寂しくて私は泣いていた

子供みたいに、ただ私は泣いた
私には泣くことしか出来ない
それを思い知らされて、泣いていた

一人、ただ歩く
重い体と赤い目を引きずりながら、帰途につく
空一面に広がる夕日が、やけに美しい

いつもよりカバンが少しだけ重く感じるのは
プレゼントが入っているからだろうか

いつもよりカバンが少しだけ軽く感じるのは
プレゼントが入っているからだろうか

一人、ただ歩く

いつの日か、私は今日の日のことを思い出すのだろうか
幸せだった思い出のひとつとして

三、スパイシー

逆上がりが出来なかったあの子は、いつの間にかオリンピック選手になっていた
女子に見向きもしてもらえなかったあの子は、いつの間にか美女と結婚していた

人生ってそんなもの
今が冴えなくても、未来はどうなるのか、誰も分からない

あの頃の僕は逆上がりも出来たし、それなりに女子からも需要があった
しかし、どうしたものか、今の僕には需要という需要が無い

全ての分野がノーマル
いたって目立つ特技もなければ、いたって人に疎まれることもない
しかし、よく考えてみると
相手の心をビリビリと震わせるわけでもなく
スマートなトークが出来るわけでもなく
気の利いたラブソング一つも歌えない
僕を愛して止まぬ人など、いなくて当然だ

「よかったらどうぞ」
気が付くと、僕の目の前につまようじに刺された小ぶりのウインナーがあった
差し出されている白い手を目でなぞっていくと、まるで絵画から飛び出してきたような美しい店員が僕ににっこりとほほ笑んでいる

平均年齢は半世紀以上の客が集う寂れたこのスーパーに、なぜこのような若くて美しい女神さまが存在しているのか
僕は言葉を忘れ、ただ立ち尽くしていた

「新発売のスパイシーウインナーです」
女神さまは、石のように固まっている僕に繰り返す
ようやく僕は、言葉を思い出した

「お、美味しそうですね」
何やらそんなことを言いながら、僕はただ必死にそれを口に運んだ
「いかがですか」
透き通るようなその声に、僕はどっぴりと溺れそうになりながらも
とても美味しいです、と美味しいのかどうか分からないそれを、強引に飲み込んだ

女神さまの笑顔はレーザービームのように、僕の心を貫いていく
新発売のスパイシーウインナーを僕はもぎとるように三袋、カゴに入れた
ありがとうございます、とお辞儀をした彼女に僕はへこら、へこらと情けなく頭を下げ、立ち去った

夜道に転がる石を蹴飛ばし、ふと思う
僕は「スパイシーウインナー」を買った

しかし、あの時の僕は「ノンスパイシー」ではなかったか
「ありがとうございます」や「美味しい」では、いたって「ノーマル」
決して「スパイシー」じゃない

フライパンにひっそりと油を引き、スパイシーウインナーをごろりと焼く
香り立つそれを見つめながら、ふと思う

普通のウインナーとスパイシーウインナー
インパクトよし、香りよし、味もよし
普通ではなく、スパイシーだからこそ、人を惹きつける魔力もある

オリンピック選手になったあの子ども、美女と結婚したあの子ども
きっと少しの「コツ」と「ヒント」と「隠れた努力」があったに違いない

ビールを買いにスーパーに行ったはずが、思いがけない女神さまに動揺し
すっかり買い忘れ、要らないはずのスパイシーウインナーを三袋も買った自分に苦笑する
少々、焼き過ぎたそれは、十分すぎるくらいの存在感だった

五年間、皆勤賞の日記帳を今夜も開く

『3月7日、水曜日、快晴。
体調は良好。アパートの家賃を振り込む。
後輩の森田と営業に回る。受注は無し。
夜ご飯は、スパイシーウインナーと麦茶。
今日も普通の日だった。』
しばらく考えて、僕はいつもの決まり文句を消して書き換えた
『今日はとても素敵な日だった。』

普通のウインナーか、スパイシーなウインナーか
普通の日か、特別な日か
僕の明日はどちらだろう

四、紅い月

雨の香りが残る夜のアスファルトの上で
私は名前も知らない男の隣にうずくまる

男のひどく汚れた服と髪と体の匂いと、私の香水が鼻を刺す
月夜が男の横顔をぼんやりと映している
男の黒くて堅そうな皮膚と、眉毛に入り混じっている白い毛を
私は時折、見つめては視線を落とす

コンビニで買った酒とあんこ餅を、私はざらりと取り出して
男にそっと差し出す
男はぎょろりとした目で私を見て、しばらくして何も言わぬまま
ほんの小さく、何かを呟いて酒の蓋を開けた

ずるり、ずるり、と鈍い音をさせながら、それを飲む男の横顔は
ただ、今を。ただ、この今を、悲しいくらいに生きていた

「これも、食べて」
あんこ餅の包み紙をべりりと剥がし、男に差し出す
また何かを呟きながら、男はそれを受け取り、迷いながらも口にほおぼる

行き交う人が、不思議そうにこちらを見つめていることなど、分かっている
怪訝そうに、不気味そうに、私たちを見つめている目が何故か心地よくて、
おかしくって、私は空を見上げていた

気が付くと、男はボロボロの布きれを私に差し出している
異臭がする小さなそれで、私は涙をぬぐった
どうして私は泣いているのか、自分に問うた
私が男にしていることは、人間としての情けか
それとも、人間としての偽善か
どちらか分からないまま、頬に涙はつたう

綺麗だな、ねえちゃん。
そう呟いたのか、私は男を振り返った
静かだけれど、あたたかい微笑みがそこにはあった
私の心の中の氷が、解けていく
何をしても、解けなかった氷が静かな音を立て、水に変わり始めていた

今夜は、綺麗な月だ。
囁みしめるように男は言った

本当に綺麗。

私も男の言葉の中で泳ぐ

名前も知らない男と月を眺める

それは、ひどく紅くて、ひどく美しい月だった

私も、男もただ生きている

ただ、今を生きている

今、二人で月を見上げている

生きる理由など、見つからない、見つけられない

けれど、それでよかった

それだけでよかった

生きる意味はただ、それだけでよかった

五、マイ ヒーロー

「悪者をやっつける正義のヒーロー」
誰に教わっていなくても、ひたすらに憧れた唯一の存在だった
いじめられっ子より、いじめっ子が完全に悪いという「正義」
社会のルールを破る大人に烙印を押すという「正義」

けれど、チャンネル回せば、非常識が常識になりつつある無秩序なニュース
正直者が損をし続ける、全く不条理な社会
未来を憂うこの世界で、もはや絶対正義など存在しない

弱者を助け、悪を退治する。
そんな構図はもう、どこにもない
そう、今の僕の心の中にだって、ほとんど残っていない良心

電車の中で学校の後輩たちがマナー違反をしても、見て見ぬふり
他人の高齢者よりも、自分の休息のためのシルバーシート
助けを求める誰かの悲鳴が耳に届いても、さわらぬ神に祟りなし

そんな僕に浴びせられる言葉は、ありきたりの罵声やレッテルか
そういう人間だって、最後は保身にかえるくせに
チープな常識や正義を振り回して、薄っぺらなヒーローの影に酔っているだけ

だから僕は自分しか信じないし、人を助けない
他人のことなど、全く興味がない

昔、婆ちゃんが僕に言った言葉
僕は、優しくてあったかい子。

友達や困った人を助けると、婆ちゃんは僕を褒めた
僕の小さな長所さえ、婆ちゃんは大事にしていた
毎日毎日、太陽に感謝し、月に手を合わせた
僕の幸せを呆れるくらい、願っていた

小さな体で僕を無心に愛してくれた婆ちゃんの遺影に
やがて手を合わせることも少なくなった
婆ちゃんの命日でさえ、僕は忘れてしまっていた
婆ちゃんが愛してくれた僕はもう、きっとどこにもいない

僕はしらじらしく、シルバーシートを避けてドア付近に立つ
乗車に手こずっている妊婦の女性を手助けする
よろよろと歩く爺ちゃんを守るように歩道を歩く

どれもこれも、なんだか足が地についていない
慣れないことをして、僕の精神力も体力も無駄に疲弊していく

できるなら、もう一度、真っ白に生きていた自分に帰りたい
できるなら、もう一度、人を愛し、人を信じてみたい
ハートが複雑骨折している僕だけど
もう一度、婆ちゃんが愛していた自分に帰りたい
もう一度、婆ちゃんに笑ってほしい

僕はやっぱり、ヒーローになりたい
けれど、子供の頃に描いていたヒーローにはなれそうもない
僕にはそんなパワーもなければ、不死身でもない
僕は「たった一人のためのヒーロー」になりたい
僕を愛してくれた人を裏切らない、この世でたった一人のヒーロー

きっとどれだけ、時間がかかっても

六、フレンズ

ずっと友達。

そう思っていたのは、私だけだったかもしれない

帰ってこない返事

私に気づかないふりをした、あの日

今でもきっと、私だけが覚えている

長い廊下が、やけに長く感じた放課後

理由はあの日も、私は一人だったから

それでも、窓に差し込むわずかな光が、自分の味方であると錯覚した

信じて、信じていたから、一人でもこの廊下を歩きつづけた

「幸せになろうよ、一緒に」

あの子がそう言ってくれたのは

校庭の銀杏の葉が、色づき始めた頃だった

夢のようなその言葉に、私は落ちていくように包まれ、掴まれ、強く頷いた

あの子はとても綺麗で、人気者で、私とはすべてが違う女の子だった

指先から髪質まで、全く違う二人に思えて

あの子と並んで歩くとき、私は一歩下がって、できるだけ隅っこを歩いていた

長い廊下がやけに、長く感じたけれど

このままずっと、歩いて行ける気がしていた

ある日、私はあの子に手紙を綴った

友達になってくれてありがとう。親切にしてくれてありがとう。

四度目に書き直したそれをあの子に渡して以来、私はまた、一人になった

それから私はどうしたのか、細かなことは覚えていない

涙するわけでもなく、怒るわけでもなく、あの子に話しかけることもなく

ただ、あの子の楽しそうな横顔と華奢な背中を遠くから少しだけ見つめた

一人でいることは寂しいけれど、苦痛ではない

誰かに裏切られることはないのだから

一人で生きることは空しいけれど、怖くはない

ずっとずっとそうやって、生きていたのだから

あの頃と全く同じように、今年も銀杏の葉に色がともる

毎年この時期になると、きまってもう一度見たいくなる

思い出す

長い廊下
窓から差し込む日差し
みんなの笑い声
一人で歩きつづけた日々
あの子の横顔と背中
あの子が私に言った言葉

「幸せになろうよ」

私は今でもその言葉を思い出す
あの子は今の私にも、同じ言葉をかけるだろうか
あの頃と同じ泣き方しかできない私に、やはり背中を向けるだろうか

もう一度、私はあの子に書いてみる
あの子に届くように、願うように、風のなかで書いてみる

一緒に廊下を歩いてくれた日
私と笑ってくれた時間
いつまでも、ありがとう。

七、ダレカ、タスケテ

苦い唾を飲み込み、太陽に手を背け、ゴールを目指す
遠く、近く、遠く、遠く。

この足はどこに向かう、誰のもとへ急ぐ
僕と自分に負けた敗北者たちの横顔を、ほんの少し見つめて行き過ぎる
僕は少しだけ鼻で笑う

あいつに勝った
あいつに勝ちたい
今度はあいつにも、こいつにも勝ちたい

終わりのない闘いのなかで、僕は戦い続ける
この肉体が壊れるまで、使えなくなるまで、この足が止まるまで
僕は戦い続ける

僕を蹴落としたい者に、負けるわけにはいかない
この身体がそれを許さない

声にならぬ声を、僕の魂だけが聞いている
誰も振り向かぬ、誰も気に留めぬ
僕を知ることもなく、ただ日付だけが繰り返されていく

僕が僕を止めるまで、ゴールは来ない
まぶたが閉じるその最期まで、勝敗は決まらない
遠く、近く、遠く、遠い。

まだまだ終わりは遠い
まだ続けるか、足を止めないか、と僕が訊く
返事を返さない僕にもう一度、訊く
どこまで続けるのか、いつまで続けるのか、
僕はようやく声を漏らしていた

「誰か、助けて」

八、四角い部屋

四角い部屋で、お茶を沸かす
ひどく苦いそれと、冷えた白飯を一口食べる
一時間前、私は四角い弁当箱におかずを詰めていた
扉を閉めて出ていった人を、見送ることもしないで

四角い部屋で、外を眺める
隣部屋から聞こえる下品な声と、ゴミ収集車の雑音が入り混じる
自分の存在価値を教えられているようで、私は唇を噛む

四角い部屋で、日記を綴る
昨日も今日も大差はない
ほんの少し、今日の湿度が高いくらいだ
書くこともないのに、ページをめくり続ける自分が嫌い

明日、出ていくかもしれないこの部屋から
いつまでも出ていけない自分が嫌い

あの人が帰ってくるその間に、私はどこに行くべきか
四角い部屋で、私はただただ考え、考え疲れ、眠りにつく
まるで永遠のように長い時間を、死んだように眠る

夢を見ていた四角いお家は、やはり夢だった
ここに来たら、これまでの孤独が消えると信じていた
もう一度、生まれ変われるように、私をリセットできると思っていた

愛情のないこの部屋で、私は今日も生きている
閉じ込められているのか、自ら閉じこもっているのか

四角い部屋で、私は料理を作る
長い長い時間が、私を包み込む
今夜にも、私を捨てるかもしれないあのの人に料理を作り、扉を開け、だらしなく服従する

あの人の寝息がこぼれている間
私の手は、あの人の首を絞めたくなる
闇の中で出しかけた手を戻しては、ひとり泣く

冷たい、寂しい四角い部屋で、私はこれまで以上に一人になった

九、青い薬

心が空っぽになった
だけれども、空しい気持ちを一人で抱えていた
ある日、産業医に勧められ、心療内科の扉を叩いた

心が憂鬱、あまり眠れない
僕の訴えをさらりと聞き流し、パソコンにかじりついている医者は
「うつ病ね、お薬、出しておきます」
中途半端な笑顔を僕に残した

三種類の薬を飲み干す毎日
内臓と心は違うせいかな、薬の効果はいまいち分からない
分からないけれども、そのうちよくなるか、と思って
僕は体内に薬を詰め込んでいく

詰め込んで、詰め込んで、やがて僕は本物の病を発症した
心の病気というモノが、信じられないという病だ
医者にも心の病は治せない、治せる薬などそもそも存在していないことに僕はようやく気が付いた

なぜなら、心の傷に化学物質は効かないから
人間の孤独の痛みを治す薬など存在しないから

治す治療法があるのだとすれば、それはきっと「青い薬」だ

本当に自分を救うものは医者でも、薬でも、他人でもない
たった一人の自分だけだ

くじけそうなハートのときは、その治療法を自分で見つける
自分だけが、自分の道を選び、自分を守る人間なのだから
心を治す「本物の薬」は、きっと、きっと、自分の手で作るもの。

だから、僕は「青い薬」を作っている
僕のハートは少しずつ、修復されている

そして、僕は今日も「青い薬」を飲んだ
自分のシアワセ、見つけるために

十、命の雫

あなたは、今日も穏やかで優しい
シワシワで柔らかなあなたの手のひらは、広くて、深くて、あったかい
あなたの心臓は百年間ずっと、動き続けている

あなたの母は、あなたが幼い頃に亡くなってしまった
だから、わずかな母との思い出を、あなたは今もこうして思い出す
その思い出話を、私は隣でじっと聞いている
安らかで無垢な表情を浮かべながら、あなたは優しい記憶をつむいでゆく

その時、あなたはいつも、娘の顔になる
幸せだったあの頃に、あなたの心は帰っている
そんなあなたの横顔を、私は静かに見つめている

いくつになっても、子は母に甘えたい
子が親になっても、母にだけは甘えたい、分かってほしい
そして、ただ無性に、無性に母に会いたい
理由もなく、子は母が恋しいもの
きっと、きっと、母こそが、自分を救い出せる唯一の人なのだから

命の終わりは、どんな人にも訪れる悲しき宿命
ゆっくりと、少しずつ近づく、もう一つの世界
あなたの横顔をずっと見続けていた私は、あなたとの別れが震えるほど寂しい
できるのなら、今、この時間を止めてしまいたい

薬で眠っているあなたは、息をのむほどに静寂だった
その姿が切なくて、愛おしくて、私はあなたのお世話よりも
あなたの隣で同じ時間を過ごしたかった
ふと、あなたは目を開け、私の顔を見た
目を覚ましたばかりの小さな目で、しばらく私を見つめて小さな声を漏らした

「お母さんですか？」

私はそっと笑って、そっと、頷いた
そしていつものように、あなたの口に水分を運ぶ

「おいしい」
あなたは、はみ出るような笑顔を見せた
水分を口に含むたび、私の顔を見て、花のように笑った
あの日、まるで子供のように、あなたは私に甘えていた

時計の針が時間を刻んでいる

いつもより、どこかゆっくりと聞こえた

一秒、一秒、私はあなたの命を見つめている

できるのなら、このままずっと、あなたを見つめていたい

あなたを誰よりも愛し、あなたを最期まで見守りたい

今だけは、あなたの母として

十一、チョコレートペイン

小さな世界

子供の世界

限られた小さな世界の中で知る、いろいろな痛み

両親がいること

身体が健康なこと

家が貧しくないこと

自分を助けてくれる友達がいること

そのどれかが欠如すれば

小さなハートにヒビができる

他の子より、少し勉強のスピードについていけなくて

他の子より、少し我慢しないといけない事情があつて

自分を守ってくれる存在が他の子より、少なくて

大人になれば、いろいろな角度に見えることも

小さなハートの頃は、自分の目に映し出される現実が全て

友達が嫌っていたあの子は、いつも一人ぼっち

毎日同じ服を着て、勉強が少し苦手で、お父さんがいない

一人、すべり台で遊ぶあの子を、私はいつも遠くから眺めていた

あの子の悪口を楽しそうに並べる友達の声に、私はうんざりしながらも

ただ静かにひっそりと生きているあの子に、なぜか惹かれていた

その日、私は理由もなく、無性にあの子の傍に行きたくなった

あの子は私に気が付いて、ほんのりと笑った

あの子に歩み寄ろうとしていた私の背中に、友達の声が鋭く刺さった

私を侮辱し嘲笑うその声の一つ、一つ重なっていく

震える自分の足元を見つめながら、ただ感じていた

今度は私が一人ぼっちになるのかもしれない、という恐怖

ただ、それだけに私は怯えた

私を置いて立ち去る友達の背中を眺め

ゆっくりと私はあの子を見た

あの時のあの子の顔は、今でもよく覚えている

言葉さえなかったけれど、その時間はとても長く感じた

私は胸が苦しくなって、締め付けられて、あの子から離れた

心臓が高鳴る音を感じながら、息を漏らしながら、ただ必死に友達の背中を追いかけ、走った

一番悪いのは、一番ひどいのは誰でもない、自分なのだと私は思った
生ぬるい涙が情けなく、こぼれていた

それからのことをよく思い出せないまま
私は私を変えられないまま、大人になった
あの子はこの街を離れ、あの頃の私の友達も、今では連絡もない
今にも泣きだしそうな私の横顔が、電車の窓に映っている

あの子が私に見せたあの時の顔
私の心の全てを分かっているかのように、見透かすように
あの子はあの時、私にほほ笑んだ
残酷なくらい、優しい顔で私に笑った

心の痛みは時間が過ぎれば、いずれ和らぐのだろうか
人の痛みも、日々の忙しさと雑音の中に消えていくのだろうか
人を傷つけた痛みと、人に傷つけられた痛みは、どんなふうに皆、心に閉まっているのだろうか
この街の景色も、私たちも、きっと何かは少しずつ変わっている
きっと、いろいろな痛みを繰り返し、人の心はひとつ、強くなる

何事もなかったかのように、電車は今日もこの街を通り過ぎていく

小さな世界
子供の世界
甘くて、苦い、いつまでも忘れられない味

十二、桃缶

桃缶を開けながら、僕は考えていた
例えば明日、僕がこの世から消えたとして
一体、誰が涙するのだろうか
一体、誰が僕を心から想うのだろうか

どんな人間だって、いつかは土に帰り、忘れられる
生命はシンプルなもので、生きることも、死んでいくことも生物のサダメ
生きている時間が皆、それぞれに違うだけ
たとえその時間を、自ら止めたとしても

ざくり、ざくりと鈍い音をさせながら、桃缶は開いてゆく
昔、母さんが同じようにしていたその背中を
僕はもう二度と、見ることはない
いつだったか、熱を出した僕が桃缶を食べたいと言って
母さんがすぐに買いに走って、僕と一緒にそれを食べた

とても冷たくて、甘くて、優しくて
その味の向こうに母さんの笑顔があった

あの時の僕は、一人になること、一人で生きることなんて
きっと想像さえ、出来なかったんだ

僕は白いお皿にひとつの桃を乗せる
もう一つをまた、お皿に乗せる
「甘いね、美味しいね」それを一口飲み込んで、僕は小さくつぶやいていた

例えば明日、僕が消えるのなら
あなたは僕に何と言うのだろうか
どんな言葉をかけるのだろうか

一人ぼっちの部屋で、僕はあなたの返事を待っている

十三、雪の人

家族。友人。恋人。

人が定義している「大切な存在」「幸せの形」
多くの人はそれを手にしているのだろう

仲睦まじく寄り添い、同じ歩幅で歩いている家族
たわいもない話で、楽しそうに笑い合っている仲間
周りが見えないほど、一時も離れられない恋人

みんな、自分の手を誰かが必要としている
だからきっと、笑って毎日を通り過ぎていける
けれど、誰にも必要とされていない手を持つ人は
いったいどうやって歩いていけばいいのだろう

希望にあふれる毎日も、太陽に負けない強い気持ちも
その入り口さえも立てない生き物たちは
いったいどうやって輝く生き物に変化していくのだろう

上から上から降る白い雪は、私の心に振り落ちる
ありふれた悲しみを溶かすように、見透かすように、包むように降り続ける
雪空のなかに私は今にも溺れそうになって、小さく座り込む

じゃらり、と雪を囁む音がして私は顔を上げる
私の前に一人の男が立っていた
男は唾を吐きながら二枚の札をポケットから取り出し、不潔そうな手で私に見せる
私は視線を落としながらも、首を横に振る

熱い紅茶をカップに注ぐ
名前さえ知らない男に注ぐのは、これで何回目だろう
今日の男もまた、それを乱暴に流し込む
男は私の話を面倒くさそうに閉じ込め、私の身体をひどく雑に扱う
無機質な男の手と体温を感じながら、私は打ち続ける心臓の音に安堵する
自分は確かに生きているのだと、私の身体が私に教える
幸福でもない、不幸でもない喜びがそこにあった
また一つ、私の身体に消せない傷跡が付いた
それはとても醜くて、とても疼いて痛むはずなのに
それでも、何も残っていない身体よりマシなのかもしれない

はらはらと雪は降り続けている

微かな雪の声と男の寝息を私は聞いている

誰にも必要とされていない人間同士が夜のなかをさ迷う
どんなにもがいて、手を伸ばしても、望む明日はやって来ないのに
私たちは愚かな夢をみる
多くの人が手にしている「幸せ」が、苦しいほど恋しいから

朝がくれば、この男も、この雪も、私の前から消えていく
まるで最初から存在などしていなかったように
私の前から姿を消してゆく

朝がくれば、私はいつものように紅茶をカップに注ぐ
誰のためでもない
たった一人の自分だけのために

十四、ホワイトシャワー

君は僕を好きになってくれた
僕に初めて会ったとき、君は僕の名前をつけたらしい
ホワイトと聞こえるたび、僕はひとつ鳴いた
僕が応えると君は喜んで、僕の頭を撫で、喉を撫で、背中を撫でた

あたたかい陽だまりの中で、君と僕は一緒にいた
あつたかい君の手も、紐がついた古ぼけた靴も、君の優しい声も全部、好きだった
だから僕は君が来ない日も毎日、君が来るのを待った
それはきっと、僕が一番幸せな時間だったかもしれない

君は僕のところへ来るたび、いつも食べ物を持ってきた
昔、食べたことがあった茶色の丸いボールや、びっくりするくらいにおいしいピンク色の固まりや、魚の味がたくさん
する長いもの
僕が食べている間ずっと、君は僕の背中を撫でていた

お腹いっぱい僕の隣で、君は何かお話しをしていた
その横顔は時々、笑ったり、下を向いたり、君の目から雫が落ちるときもあった
君が何を言っているのか、分からない僕は
君の指を舐め、髪を舐め、膝に乗って、君の体を温めることしかできなかった

君がやって来る大きな木の下で、僕はいつも君を待った
君じゃない他の人も僕に食べ物をくれて、僕を撫でていくけれど
僕は君の声も体温も、決して忘れることはなかった

君は僕に会いに来なくなった
大きな木の下に咲く花が変わっても、君は来なかった
だけど僕は君を待ち続けた
君が僕の名前をいつ呼ぶか分からないから、僕はずっと耳を澄まし続けた

空から冷たいシャワーが降る日だった
僕はいつもの寝床で丸くなって、一人ぼっちで寝ていた
僕を呼ぶ声が微かに聞こえた
僕は思い切り走って、走って、声のする方へ走った
大きな木の下に、君がいた

ホワイト、と君が僕を呼んだ
僕は体中から絞り出すように、大声で鳴いた
君は僕の名前を繰り返して呼び、頭を撫でた

僕はもう十分に嬉しかった

君は僕が大好きなピンク色の固まりをポケットから出した

いつもは一つだけど、今日はたくさんあった

僕が食べている間、君は僕の背中を撫でていた

僕は大好きなご馳走よりも、今、君の体温を感じられることが嬉しかった

だけど、僕を撫で続けている君のその手が止んだ

そして、君の体は地面の上に倒れこんだ

僕は君の顔を舐め、鳴きつづけたけれど、君は呼吸をするのが苦しそうで

目をつぶり、また僕を見て、少し笑うだけだった

君の体の体温が冷たくなっていることが分かった

冷たいシャワーのせいだと、僕は思った

僕は自分の寝床に君を連れて行こうとして、君の靴の紐を噛んで引っ張った

紐がちぎれてしまって、僕は大きく鳴いた

鳴いて、鳴いて、君を呼んだ

君は、もう僕の名前を呼んでくれなかった

目を開けて僕を見ることも、頭を撫でることもなかった

ただずっと僕の隣で眠っているようだった

僕は君の腕の中に入って、君の冷たくなった顔を舐めた

もう君は目を開けないのだと、僕は思った

そしてこれからも君の傍にいたいと、ぼくはひとつ、鳴いた

君は僕を好きになってくれた

僕も君が大好きだった

君が来るのを待ち続けて、待ち続けて、そして君は来てくれた

一人ぼっこの僕のところへ

君がいなくなってから、僕はまた一人ぼっちになった

そしていつもと同じ寝床で、僕は今も眠っている

君がいなくなってから、僕は走ることも苦手になって

食べるものもほとんど要らなくなった

眠る時間が多くなって、欲しいものはもう何もなかった

目を閉じると、暗闇の中に君の顔が浮かぶ

君はあの頃と同じ、僕のところへやって来て、僕は君を待っている

あたたかい陽だまりの中で、僕たちは一緒にいた
なつかしい、恋しい記憶が僕の体を包んでゆく

それはいつまでも消えることはなかった

十五、飛べない蛙

蛙は飛べる。当たり前。でも、飛べない蛙だっている。
人間だって同じ。キラキラ輝けない人間だっている。

飛べない蛙は、自分も飛べるはずだと錯覚する
輝けない人間は、誰かは分かってくれると期待する
残酷なくらい、夢を見る
夢が夢と分かるまで、夜を超え、朝を迎える

飛べる蛙は、もっと飛べるはずだと思い込む
輝ける人間は、その光の強度を永遠に他者と競い合う
残酷なくらい、夢を掴む
夢が夢とならぬように、夜を超え、朝を迎える

人は美しく、輝いているものに惹かれて
うす汚れ、光を失ったものには見向きもしない
強者にはひれ伏し、弱者はふみつけていくもの
それがまるで当然であるかのように、人々は明日を生きている

どちらも、同じ一つの命なのに
どちらも、同じ一つの人生なのに
この空の光が平等に射すことは、きっと無い

それでも生き物は、夢を描く
漠然とした幸せを追い求める

たった一つ、両者にとって同等なものがあるとするなら
それはきっと、誰にも盗むことのできない時間と自分の心

幸福に定義は無い
自分の可能性を測れる人などいない
自らピリオドを打たない限り、希望は逃げていかない

だから、今夜も僕は同じ空の下で跳ねている
まだまだ低いジャンプだけれど、昨日よりきっと高いはずだから
僕は力強く、空を見上げる
ジャンプした後は、草に隠れながら唄を歌う
美しい月夜は僕を毎日、照らしてくれるから

僕は今を生きている

僕は今を生きていく
僕が僕であるために

飛べない蛙

<http://p.booklog.jp/book/98040>

著者 : kotoko2400

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kotoko2400/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98040>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98040>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ